

模擬授業研究会の斉藤メモ(2019年11月21日)

授業者：〇〇

範囲：生命倫理と安楽死について

主な感想・代案

- 倫理っぽく、じわじわと深く考えさせようとしていることが伝わってきました。〇〇君のキャラクターとも相まって、じっくり考えられる雰囲気が出ていました。
 - 資料の過不足については研究会で議論しそうなので、言及しません
 - 今日扱った問題の論争性について、もう少し可視化した方が良いように感じました。安楽死の問題は、科学技術の発展の問題とも密接に関わります。そのことは戸田君もよく分かっているとは思いますが、目標検証シートの最後の生徒の理想となる解答例の内容が、「自己決定権や QOL を視点に置きつつ、安易に史を助長することのないような、厳格な枠組みを作り、誰もが安心して自分らしく過ごせるような制度を作るべき」の一つのみを書いている点が少し気になりました。
 - この授業では、「正解がないこと」を強調しているのだと思うのですが、そのこと自体を強調するというよりは、この問題について何を言ってもいいという仕掛けを作る必要があるように感じます。その際に個人的に重要と感じるのは、「折衷案のような意見」よりも「多少偏っていても自分の考えが反映させやすい意見」を出せるような工夫をすることではないかと思うのです。
- ⇒ 私であれば、⇔の線を長めに書き、片方に「科学技術によって人の生死をある程度コントロールしてよい」、もう片方に「自然の流れに任せるべき」という線を書き、自分の考えの位置を記入させ、その理由を書かせます。その際に、真ん中らへんはできる限り書かないように指示します。

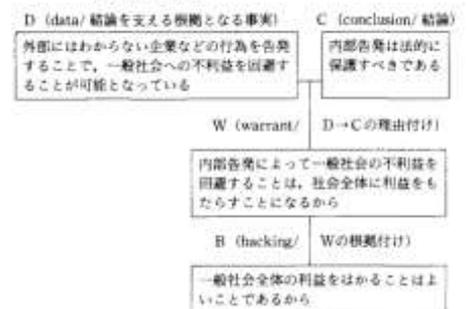
【コラム】理論と実践の接点

倫理の授業では、先哲の思想や現代の諸問題を通して、自分の生き方・考え方と向き合うことが求められる場合がよくあります。その場合、自分がどのような価値を優先して考えているのか？という点を対象とした授業にするのが良いような気がします。賛成か反対かを選んだり、生徒同士で議論をすると、一見すると、自分を見つめなおすような気もしますが、それだけでは中々背後にある価値観は見えてきません。

そういう場合に議論の枠組みを分析する手法として「トゥールミン図式」というモデルが提案されています。この図式においては、主張は「データ」（結論を導くための証拠の部分）と「理由付け」（データから結論への結びつきの妥当性を表すもの）に基づいて作られます。こういった図式を使うことで、生徒の価値観を問い直す方法はあるかもしれません。たとえば、吉村（2003）でも、企業の内部告発をめぐる、異なった根拠づけとデータに基づけば、異なる主張になることを示しています。こういった分析を生徒が行うことで、自分自身が重視している価値が浮き彫りになるかもしれないなと思いました。

【参考文献】吉村功太郎(2003)「社会的合意形成能力の育成をめざす社会科授業」『社会科研究』第59号, pp.41-50.

【別掲1】：内部告発を法的に保護することに賛成する側の論理構造：検証前



【別掲2】：内部告発を法的に保護することに反対する側の論理構造：検証前

